

大規模氾濫時の減災対策協議会資料

令和 3 年度の取組等

1. 顕著な大雨に関する情報
2. 記録的短時間大雨情報に関する改善
3. 顕著な台風等が接近した際の呼びかけ方の改善
4. 段階的に発表される防災気象情報の活用例

1. 顕著な大雨に関する情報（線状降水帯による大雨の危機感を伝えます）

令和3年6月17日から実施

● 背景 ～なぜ始めるのか～

毎年のように線状降水帯による顕著な大雨が発生し、数多くの甚大な災害が発生しています。この線状降水帯による大雨が、災害発生の危険度の高まりにつながるものとして注目されており、線状降水帯による大雨が発生している場合は、危機感を高めるためにそれを知らせてほしいという要望があります。

● 位置づけ ～情報のコンセプト～

大雨による災害発生の危険度が急激に高まっている中で、線状の降水帯により非常に激しい雨が同じ場所で降り続けている状況を「線状降水帯」というキーワードを使って解説する情報です。

※ この情報は警戒レベル相当情報を補足する情報で警戒レベル4相当以上の状況で発表。

● 最近の山形県内の事例（平成29年7月以降の「顕著な大雨に関する情報」の発表が想定される事例）

平成30年8月5日から6日の大雨（前線）（対象地域：庄内・最上）、令和元年台風第19号（対象地域：村山）など。

● 留意点

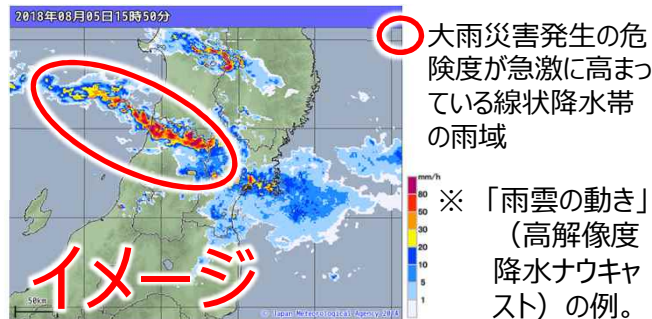
既存の府県気象情報等も含めた一連の情報で気象台が持つ危機感をお伝えする。顕著な大雨に関する情報や「線状降水帯」の場所を示す赤楕円の出現を待つことなく災害発生の危険度の高まりを示すキキクル（危険度分布）を活用いただくことが極めて重要。

平成30年8月の大雨における線状降水帯に関する情報のイメージ

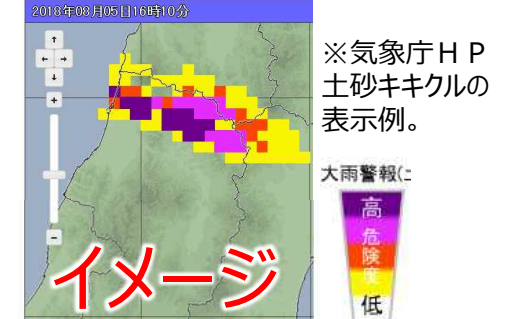
顕著な大雨に関する山形県気象情報

庄内地方、最上地方では、線状降水帯による非常に激しい雨が同じ場所で降り続いています。命に危険が及ぶ土砂災害や洪水による災害発生の危険度が急激に高まっています。

線状降水帯に関する情報を補足する図情報のイメージ



土砂キキクル（危険度分布）のイメージ



※線状降水帯とは・・・次々と発生する発達した雨雲（積乱雲）が列をなし、組織化した積乱雲群によって、数時間にわたってほぼ同じ場所を通過または停滞することで作り出される、線状に伸びる長さ50～300km程度、幅20～50km程度の強い降水をとまなう雨域。

2. 記録的短時間大雨情報の改善

令和3年6月8日から実施

- 記録的短時間大雨情報は、大雨警報発表中に、現在の降雨がその地域にとって土砂災害や浸水害、河川の洪水災害の発生につながるような、数年に一度しか観測されない雨量であることを伝える情報。
- この情報が発表された場合は、どこで災害発生の危険度が高まっているかをキキクル（危険度分布）で確認し、自主的な安全確保の判断を促すことが目的だが、これまで災害が発生しない事例もあり改善策を検討。
- 記録的短時間大雨情報を当該市町村が警戒レベル4相当の状況となっている場合にのみ発表。

これまで

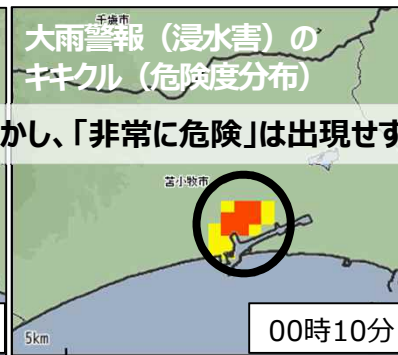
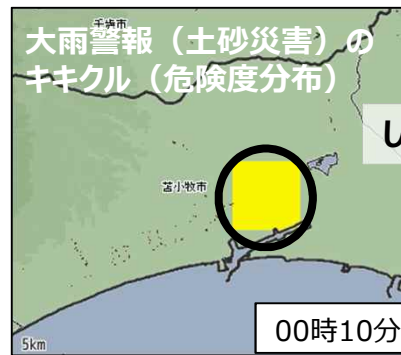
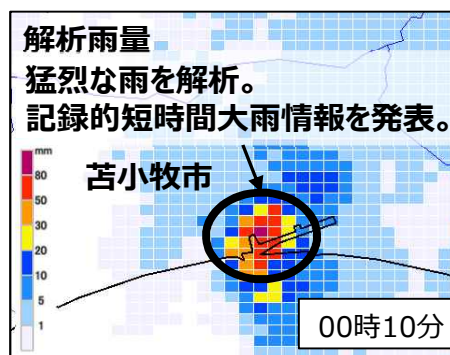
大雨警報を発表中に、記録的短時間大雨情報の基準に到達したときに発表。

災害発生と結びつきが強い情報に改善

改善後

キキクルで「非常に危険」(レベル4:うす紫)以上が出現し、記録的短時間大雨情報の基準に到達したときにのみ発表する。

令和元年11月12日の胆振地方の例



しかし、「非常に危険」は出現せず、災害も発生せず。

キキクルの危険度を発表条件に加えることで、災害発生の危険度が急激に上昇し、速やかな安全確保が必要な状況となっていることが伝わるように改善。

3. 顕著な台風等が接近した際の呼びかけ方の改善

令和3年出水期

①大雨や暴風等によって起こりうる災害の解説を一層強化

- ▶ 「特別警報級」の台風接近時に、降雨や暴風等によってどのような災害が想定されるのかがより伝わる資料を充実させる等、解説を一層強化する。

・主な災害時に観測された風速と被害写真を例示、風速によって起こり得る災害を解説



令和元年房総半島台風
(経済産業省提供資料)

②効果的なタイミングで災害の解説を一層強化

- ▶ 緊急時には簡潔な表現で起こりうる災害の解説を行うとともに、緊急時に用いる表現の意味が的確に伝わるように、平時から「どこで」「どのような」災害が発生するおそれがあるか等の解説を一層強化する。

・状況に応じた災害の解説

平時

台風のように長時間のリードタイムを確保できる現象では、社会の関心が高まっているタイミングでしっかりと解説。

緊急時

記者会見等では必要な情報のみ伝える。表現できる文字数が限られている時は簡潔に。



風速35~40メートル
で走行中のトラック横転

③安心情報と誤解されないような情報発信を推進

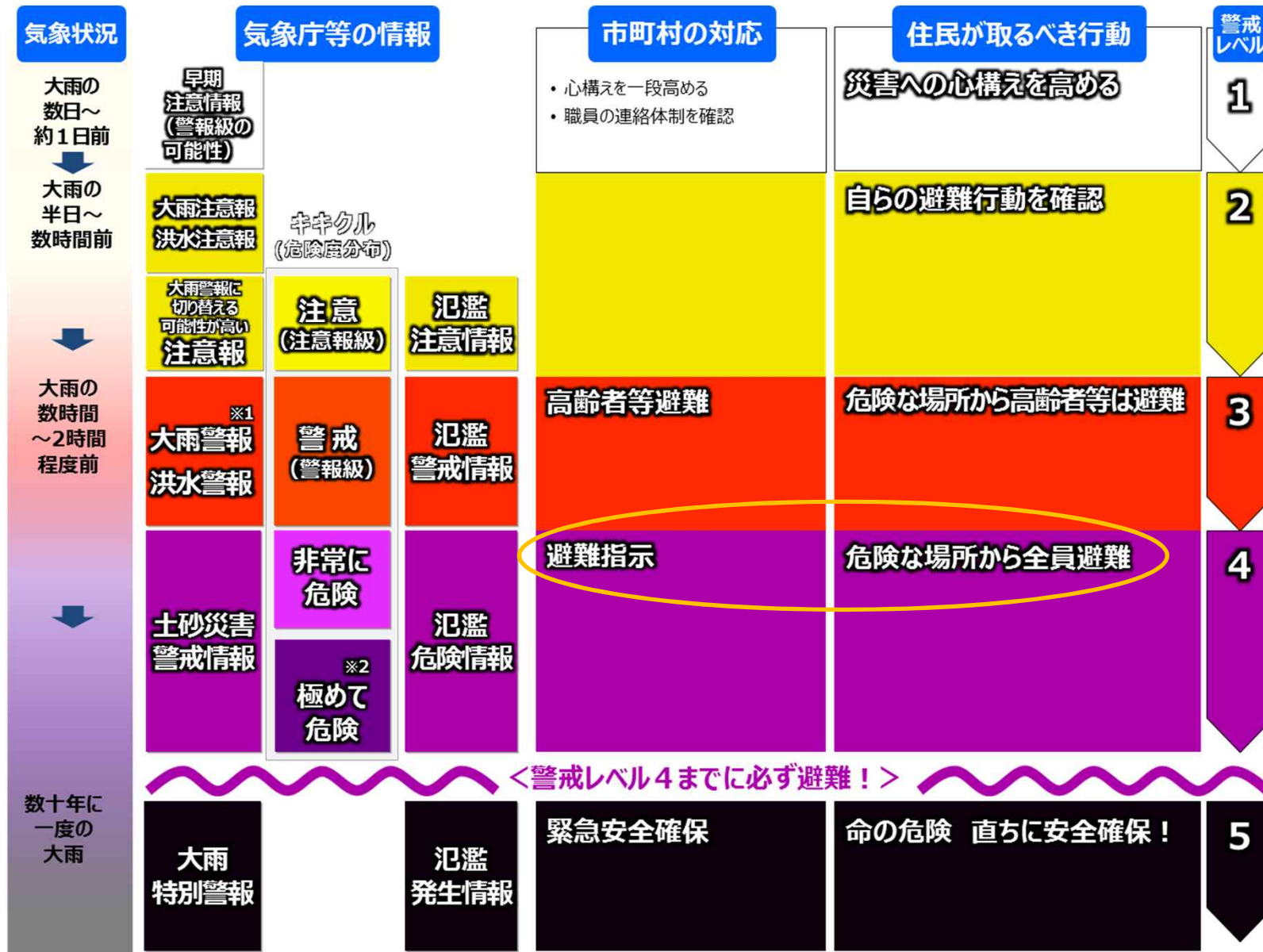
- ▶ 気象台等のもつ危機感が効果的に伝わるよう、地域に密着した情報発信を引き続き強化する。
- ▶ 安心情報として誤って受け取られることのないよう、詳細な情報を住民自ら取得してもらえる解説や、引き続き避難行動が必要とされる状況であることの解説を強化。

・「特別警報の可能性は小さくなりました」といった表現をする場合（特別警報から警報への切り替え時も同様）

- 起こり得る土砂災害や洪水、高潮等の災害をしっかりと解説。
- 避難行動が必要とされる命に危険が及ぶ災害が引き続き、または今後予想されている状況を解説。

4. 段階的に発表される防災気象情報の活用例（大雨のみ）

5月20日から



「避難情報に関するガイドライン」（内閣府）に基づき気象庁において作成

※1 夜間～翌日早朝に大雨警報(土砂災害)に切り替える可能性が高い注意報は、警戒レベル3（高齢者等避難）に相当します。

※2 「極めて危険」（濃い紫）が出現するまでに避難を完了しておくことが重要であり、「濃い紫」は大雨特別警報が発表された際の警戒レベル5緊急安全確保の発令対象区域の絞込みみに活用することが考えられます。